

著・七ものは

絵・つた

# 正味の味

原曲 輝針七伴(力外)



——掲ぐ理想に、捧ぐ覚悟を——

## 第二章

ごろごろと鳴り響く低い音。

あたりは陰り、視界が悪い。

宛ら雷雲の中——といつても、厳密には、それは雷雲ではない。

あたりに満ちているのは、魔力による「放電」だ。

高濃度の魔力が、周囲の空間との「電位」差によって、その濃度の低い方向へ、奔流として流れを形成する。そして、そこに出来上がった魔力の空白地帯に、また周囲の魔力が注がれる。

魔力の濃淡による魔擦と発光。そして、この一帯は、常に雷が鳴り続けているかのような音をさせている。

通常、これほどの魔力が狭い空間に自然に集まることはありえない。何かしらの人為的な影響が考えられた。

はたして、その魔力は、広大に渦を巻いており、その中心には——城があった。

堂々たる、大きな城。誰の手によるものか、その建築は仔細が知れない。塀、櫓、天守。あるべきものをすべて備えているが、一方で、どこか陳腐にも見える。職人、大工の拘り、

制作に携わったものの意匠、意趣、そうしたものは感じられない。ただただ『豪華な城を作る』という目的そのもののためだけに作られた城、という様相だった。

さて、その城には、いくつか不自然な点があった。

まず、この魔力の雷雲にあつて——ここは雲の中。城そのものが、宙に浮いていた。その理屈は知れない。魔力とはそういうものなのだと行ってしまえばそこまでだが、魔力の中心も、この城であるようだった。

次に、その城を守るものが見当たらない。城は外敵を防ぐためのもの。建てたものの威力を現すもの。遠目に、どこにも人員が見当たらないのは、やはりこれも奇妙であつた。

そして、最も奇妙な点——誰しもが、この城を目にしたとき、指摘するであろう違和感。この城は、天地が逆さであつた。

逆さに聳える城。その威容は、また、極めて異様でもあつた。

天地が逆では、一体どこが最も位の高いところなのか、それさえも確かではない。

さて、本来であれば天守閣に相当する部分。そこに、小さな影があらわれた。

城の大きさに比して、とても小さな影——それが、開け放された戸を潜り、城の内部へと足を踏み入れる。

それは、侵入者だった。

招かれざる客は、堂々と城内に踏み入る。

やはり、この闖入者を出迎える者は無かった。

外は雷雲。室内には灯りもない、暗い城内。やはり、無人の城であるのか。だが、影はそこで立ち止まり、

「聞いたぞ」

言葉を発する。にやりと笑いながら。

「聞いたぞ。お前たち小人のことを」

「聞いたぞ。お前たちが為した行いの全てを」

「聞いたぞ。お前たちが虐げられた、歴史の全てを！」

声が響き渡る。そこに籠められた、露骨な挑発の意図。一切合財が隠されずに発せられる。

そのとき、一際強い雷光が閃いた。

かつ、と白黒に照らし出される室内。

声の主——照り返されたその姿は、角を生やした、小鬼だった。

「悔しかろう。無念だろう。哀れでならないなア。お前たちのような小<sup>ちいさな</sup>人は、誰からも目を向けられずに、こうしてここで朽ちていくのか!!」

小鬼は続ける。自分の言葉が届いていると信じて。

そこで急に、声色を落として。

「なあ、全部をひっくり返す気はないか。お前たちだけじゃない。虐げられているすべての弱きものたちの為に」

「なあ、立とうじゃないか。例え誰と相談とうとも。私だけは、お前たちを見捨てない」  
視界の端に動くものがあった。

小鬼はそちらを向き直る。そして――

「私が、お前たちの味方になってやる」  
甘言、ここに極まる。

此処に住まうものが何者かを考えたら、到底受け入れられるものではない、その提案。だが、小鬼には絶大な自信があった。

こいつらは、動く。私の言葉で、動く。

そこに根拠はない。それでも、自分の計画の成功を確信していた。

「――」

応える声の気配があった。

今度こそ、声が届いたのだった。

## 『正義の味方』

## 第二章

永遠の三日天下は、結局のところ、やっぱり三日天下だった。

天邪鬼、鬼人正邪と小人、少名針妙丸を首謀者とした付喪神異変は、それ相応に幻想郷を巻き込む騒動となり、それ相応に幻想郷を賑やかした後、それ相応の対応を引き起こし、それ相応に鎮圧された。最後はそれ相応の宴が開かれてそれ相応に一件落着。

妖怪には暇つぶしとエンターテインメントを、巫女には非日常を提供する結果となったが、人間にとっては、世は並べて事もなく。今日も変わらぬ日が過ぎていく。

さてでは首謀者はいえ、首謀者の宿命として、幻想郷中を追い回されて弾幕玩具として叩きのめされ、目どころか色々当てられない姿となり果てた。

天邪鬼——鬼人正邪は、傷ついた体（そして服）を抱えて、ひっそりと岩屋の奥に身を横たえていた。

宴も終幕、もう自分を追い回すものもないようだが、それでもしばらくは目立たない場所の方がいい。もともと目立つよりもひっそりとした場所の方が好みだったし、まだあ

まり満足に動ける体でも無かった。けれど、気分はそう悪くもない。

幻想郷を引つ掻き回すという自分の企みは実を結んだわけだし、それについて考えるだけで、暫くは愉快な思いに浸れるだろう。

あれは博麗の巫女だったと思う。何とも頭の悪そうな顔だったが、あの必死さといったら、特に傑作だった。ぐるりぐるりと回る世界に翻弄される姿は、愉快この上なかった。乗っていた箒から振り落とされそうになりながらも、銀色の刃物を振りかぶって必死に追いつがる姿。あれは、今まで見てきた中でも指折りの――

――そこまで考えて、ふと思い返す。

自分は今まで他にどんな嫌がらせをしてきただろうか、と。

生まれてこの方、人の嫌がることに快感を見出してきた正邪だったが、では今まで一番は、と問われると、さてこれはちよつとした難問だった。

自分が今までしてきたこと。

正邪は、その日暮らしが基本だった。

過去にはこだわらない信条で、未来もない。ただ、楽しい今が続けばそれでいいと、そんなふう感じていた。

そうだな、この際、少しじっくりと考えてみてもいいかもしれない。自分のしてきたこ

とを振り返るなどというのは趣味じゃないが——

憔悴と綯交ぜの緩い高揚感。ひやりとした岩肌の冷たさを感じながら、正邪が宴の余韻に酔っていたところだった。

そこに、声がした。

「こら、だから言つたらう？ 降伏した方がいいって」

頭上だ。声はすれども姿は見えず——けれどもこの声の主を、正邪は知っていた。

「……ああ言われて降伏したら、天邪鬼としては失格ですから」

「まあ、あんたならそう言うと思つたよ」

姿を見せずに声を発する。幻想郷ならそうした存在はそう珍しいものでもないのかもしれないが、姿が見えない要因も様々で、この場合、その要因はもつとも単純だと言える。

声の主に視線が届いていないだけ。

ごろりと体を動かして、先ほどまで死角だった空間に向き直る。

やはり彼女はそこにいた。

小鬼の自分よりも遥かに小さい。せいぜい自分の膝下くらいか。

緋を基調にした和装。腰に差した針かたなは、今は鞘に納められている。身の丈に合わない大きさの、椀——あれはいつも一緒に持ち歩いているようだが、不便ではないだろうか。し



かし改めて見ると、その身なりは、やはりそれなりの身分なのだろうと思う。小人の権力図には明るくないが、さもなければ、自分の目的には適わなかったのかと思う。

私に利用された、愚かな小人。少名針妙丸。

哀れだとは思わなかった。利用される方が悪いのだ。それにこいつは、自分が利用されたとはつゆほども思っていないだろう。小人が虐げられた理由もわかるうというものだ。

こいつは、甘い。甘すぎる。正義の味方になったつもりだろうが、要は哀れなピエロだ。で、何しにいらつしやっただんですか。もうこちとら煙も出ないよ」

「なあに、ちよつとあんたに用があつてね」

「こつちには無いんですけど」

「そういうなよ。あんたにお礼が言いたかつたのさ」

いやはや、この期に及んで「お礼」とは。やつぱりこいつは大馬鹿者だ全く。しかし「お礼」というのは厭な響きだ。言われていい気分になるやつのが知れない。

「お礼、ねえ。感謝されるのは好きじゃないんだけど」

「あはは。そうだろうね。けど、私は感謝したいんだよ」

「ふん、そうかい」

些か気分を害されたようにも感じたが、なんといつてもこいつは私に踊らされた最大の

犠牲者だ。しかも、未だにそのことを意識してさえいないようだ。何処までも愚かな小人の「姫」。ああ、これだからお姫様は世事に疎いといったところか。その姿を見ているのは、これはこれで悪い気はしない。だが――

「いやあ、正邪、あんたはよくやつてくれたよ、本当にありがとうね」

感謝されるというのはやっぱりどうにも気持ちがよくない。そもそも、私に感謝するところがあるというのが不思議だった。それで――

「感謝したいって、何にさ」

つい、口をはさんだ。いい加減、この口調にも疲れてきたところだ。

返答。特に気にするでもなく。

「そうだなあ、強いて言えば、あんたの存在そのものに、かな」

「……存在？」

何だこいつは。大馬鹿者というより、もともとどこか変なのかもしれない。私の存在に感謝などと、益々もって気味が悪い。

「そう、あんたの存在。小槌の魔力を用いて、全てをひっくり返そうとするあんたの発想は、本当に素晴らしかった。あんたの能力もあって、大きな異変になったわけだ。あんたが生まれてきてくれてよかったよ、本当ね」

どうにも気持ちの悪い言い回しばっかりだ。生みの親でもあるまいし。生まれてきて感謝などと、勘弁してくれ。

「はあ、それより——」

いつまでもこんな話を聞かされちゃあ堪らない。話を変えようと思つて。

「打ち出の小槌はどうなった？」

あの力。回収期に入ったということだが、その性質には興味があつた。幻想郷をひっくり返すなんてたいそうな目的だけでなく、もつともつと、いろんな汎用性いたずらができそうな感じだ。話を聞けば、これからも上手く利用できるかもしれない。

「そう、小槌だ。ここに持つてきているよ」

打ち出の小槌。改めて見ると、その姿は何か禍々しくさえある。

異変のときは、こいつがそれを揮うのを見るだけでどこか力が湧いてきたものだが、今となつては、真逆の気分だった。なんだか、気分が悪くなる。

「そう。それで、小槌の魔力は回収期に入ったわけだけど、一つ聞きたい」

「うん？」

聞きたいのはこつちの方なのだが。

「体の方は何ともないかい？」

「——？」

妙なことを聞く。小槌の魔力と、私の体にどんな関係があるんだ？

「私の体がなんだった？ 小槌と私は何の関係も——」

「あるんだよ、それが。ああ、あんたはその辺はよくわかってないからね。それじゃあ仕方ないね」

「おい、さつきから聞いてれば、何をわけのわからないことを——」

いい加減イライラしてきた。要領を得ない話はもう沢山だ。

追いつ返そうとしたその瞬間。

「あんたは、小槌が生み出したんだよ」

予想もしない言葉が飛んできた。

「——は？」

今こいつは何といったか。

私を、生み出したと？ 何が？ 小槌？ どうして？

「我らが小人の至宝、打ち出の小槌。ありとあらゆる願いを叶える、奇跡の御業。まあ、元は鬼のものだったというけれど。細かいことは気にしない。重要なのは——」

一瞬の間。それを告げることを愉しむように。

「小槌の魔力が、あんたを作り出したっていう点だ」

「私が、作られた……?」

「そう。あんたは小槌によつて生み出された存在。命を得て動き出した付喪神どくぐどもよりも、もつと純粹な生命。小槌によつて生まれ、今もこうして生きている」

「——は。何を馬鹿げたことを。嘘をつくならもうちよつと巧く吐くんだね」

アマノジャクを騙そうなどは片腹痛い。そんな嘘で騙されると思つていいのか。だが、私を担いでもこいつに特に得は無いはずなのだが。それがどうにも不気味だった。

「まあ、そういうと思つてたよ。じゃあ、訊くがね。正邪。あんたは何も不思議に思わなかったのか?」

「——」  
もう答えるのも煩わしい。早くどこかへ行つてくれないか。

その沈黙をどう取つたか、こいつは喋り続ける。

「あんたは、紛い物だ。本当は、鬼ではない。どうして鬼の世界に居られた?」

どうでもいい話だ。妖怪一匹に目くら立てる奴らでもない。

「あんたは、小人自身も忘れていた、小人の歴史をどこで仕入れた?」

どうでもいい話だ。あんなの、口から出まかせだ。

「あんたは、小人じゃない。むしろ小人の敵に近い。そんなアマノジャク鬼の話を、小人が真に受けるとでも？」

「どうでもいい話……だが、自分の語りには自信があつた。それを、根元から否定されるのは、流石に耐えがたいものがあつた。」

口を開く。

「——それは、お前たちが阿呆だつただけだろう」

「違うね。正邪。あんたの話は、何でもよかつたんだ。弱者がどうか、そんな話は、はつきり言つてもいいのさ。下剋上なんて、初めからできるとは思つてない。やるだけ無駄だとさえ思うよ。ただ、大きな騒ぎがあればそれでよかつたのさ」

あまりにもはつきりと言い放つので、面食らつた。

「じゃあ、お前は何のために——」

「決まつてるだろう。我が一族が、再び民を支配するためだ。そして、そのためには、仲間が必要だつた」

一呼吸。

「だから、こう願つた。小槌よ、『共に手を携える者』を与え給え、と」  
それが、私だといふのか。返す返すも馬鹿げている。

「仲間であり、共犯者であり……そして、手下である。そいつは、味方になるべくして産みだされる。そして、呼び出したものの望みどおりに動く。そいつは、幻想郷を引つ掻きまわすことを提案し、私たちは、まんまとそいつに乗せられる」

その確信に満ちた声色。まさか、はじめからすべてが。

「——じゃあ、すべてが……予定ずくだったのか」

それには答えずに。代わりに笑いながら。

「あははは、傑作だとは思わないか？ 誰からも相手にされない小人に味方するものが、誰からも相手にされないアマノジャクでした、なんて。正直あんたに最初に逢った時は、笑いを堪えるのに苦労してたんだよ？」

その様子は極めて雄弁。答えは疑いようもなかった。

「小人の歴史を捏造したあんたの話の中で、一点だけ全面的に同意できる点があった。そう、本当に私たちは虐げられていたのさ。他の弱きものどもなどどうでもいい。我らは、我らの為に立ち上がる。そして、我らを虐げた全てのものに復讐してやる。それが、我らの正義だ」

淀みない口調。こいつはこんなにお喋りだったろうか。自分のイメージと次第に乖離していく。哀れな姫とばかり思っていたのに。

「異変は大成功だったよ。幻想郷は遍く小人を知った。我らは再び、この地に舞い戻ることができた。そう。一族の礎は築かれたんだ」

半ばうつとりとさえしながら、小人の姫は続ける。

「長い時間がかかるだろう。だが、それでもかまわない。小人は再び民を得て、いつしか全てを支配することだろう。それこそが小人の野望であり、望みであり、願いなのだ！」

一族の指導者たる者の言葉。姫であり、王たる者の言葉だった。

こいつの眼には迷いが無い。一切が、本気のようにだった。

本気で、この幻想郷をひっくり返そうというのだ。一朝一夕ではない。長い、気の遠くなるようなスケールで。

「正邪、あんたにとつては、私たちを騙すための、ごっこ遊びのつもりだったのかもしれないけど、セイギノミカタは本当に実在したのさ。あんたは本当に正義の味方だったんだよ」

こいつの言葉がぐるぐると脳裏を駆け巡る。

嘘にしては出来過ぎだ。

混乱する。

そういうのは自分の得意技なのに。



「おーい、聞いてるか？ 無視しないでくれよ。私たちはそれが一番嫌いなんだからさあ」

こいつの話は、大きすぎる。証拠もない。要領を得ない。

けれど、一つだけ確かなことがあった。

こいつは、はじめから、私を騙していたのだな。

私に騙された振りをして、私を利用したと。そういうことなのだ。

「お前たちは、本当に、私を、騙したのか……？」

「騙したというより、お前は最初から、そのために存在しているのだから、騙したも何もない。でも、まあ、そういう言い方もありかな。あんたの存在そのものが全てを騙しているし、あんたは間違いなく、私に騙されたんだ」

その言葉で十分だった。

屈辱の極みだ。目の前が真っ暗になる。

こいつは、許して、おけない——

私はアマノジャクだ。人を騙すことに己を見出す、アマノジャクなんだ。そのアマノジャクが騙されたなど、存在としての沽券に関わる。こいつは許してなど置けない。今すぐ、この場で、こいつを——

「よくも……よくも！」

ありつたけの力で身を起こす。まだ本調子ではない。体が重い。まだ怪我也も治っていないし、力が十分に入らない。

それでも、小人一人くらい、敵ではないと思われた。

「おつ、どうしたんだ。さっきのじゃやりたりないのか。どうだ、もう少し『遊ぶ』かい？」  
「これは遊びじゃない。……逃がすものか。アマノジャクを騙して、生きて帰れると思うなよ」

相手は所詮小人だ。力の差、体格差は明らかだった。いつもみたいに、ひつくり返す必要さえない。文字通り捻りつぶしてやろうと、腕を振りかぶる。

だが。

「?!」

がくんと体から力が抜ける。たまらずうつ伏せに突つ伏す。なんだこれは。体の調子がどうかという問題ではない。何か大きな力によって押さえつけられる感覚。体がこの行いを許さないかのような錯覚。

何だ、一体、何が起きている？

戸惑いつつ、何とか顔だけで上を向く。すぐ傍に、あいつがいた。  
にやにやと笑みを浮かべながら。

小人に見下ろされている。なんて、最悪の光景。

「悪いんだけどね、そういうことは、できないんだ。わかるかい？ あんたは、そういうことではできないんだよ。正邪。あんたは私の『仲間』で『味方』なんだから。そういう願いの元に生み出されたんだから。あんたは私を傷つけられない。『遊び』以上には、ね」

そんな。まさか、本当に。

そんなことがあるものか。

自分は生まれついでのアマノジャクで——では、自分はいつ生まれた？

さっきの問いが反芻される。気付いたら自分は自分だった。いつか、なんて。そんなこと、考えたことも無い。

では、今までで一番愉快だったことは？

そんな昔のこといちいち——

じゃあ——異変のときにお前の相手をしたのは誰だった？

どんだんぼやけていく記憶。

「お前が、私を、作った……本当に……」

「だからさっきからそう言っているだろう？ 何だ、今更理解したのか。物わがりの悪い

やつだな」

自分が産みだされた。こいつに。

もはや、疑うことができなかつた。

理解させられてしまった。

瞳に滲む、驚愕、そうして、次第にそれは恐れの色を帯びていく。

その全てを見て取つた小人は、途端——

「つはははは！ 馬鹿め！ 馬鹿な小鬼め！ 自分を生み出したものに敵うと思つていたのか！ 小人に従わされる小鬼など、哀れでならないな！ あはははははははは!!」

爆ける様に、甲高い笑い声を発した。

心底愉しくて仕方ないといった声色。露骨な嘲笑。一切合財が隠されずに発せられる。

ああ、これがこいつらの本性か。自尊心ばかりが高く、いつも人を見下して生きる、小人。何重もの意味で、小人なのだ、こいつらは——正邪は思う。

ひとしきり笑い終えた後に、急に落ち着いた声で。

「さて正邪。私がおここに来た本当の理由はね。——あんたを回収するためさ」

回収。その言葉に、ぞくりとする。

「私を、どうするつもりだ……」

「使い終わった道具は、回収され、処分されなければならない。新たな使い手を得て動き出すなど、以ての外さ」

滅多にない機会を楽しむかのように。いや、実際、楽しんでいるのだろう。

「あんたの目的は果たされた。あんたはここで終わりなんだよ。正邪」

その言葉は、決定的だった。こいつは、私をここで――

「哀れ、アマノジャクに乗せられた小人は、それでも幻想郷に認知される。そして、一方のアマノジャクは、全ての悪意を引き受けて、消えていく。どうだ、素晴らしい筋書だろう？ 道具としてその存在を全うできることを喜ぶがいい」

「私を、あの付喪神と、一緒にするな――」

「あはは、そうだね。今となつては、あんたはあいつら未満だね」

――ああ、こいつらは、最悪だ。

「さあ、お喋りはこの辺でいいかな。あんたはもう、要らない」

――だから、こんな時でさえ。

「今までありがとうね、正邪。本当に感謝してるよ」

――こういうことを言つてのけるのだ。

「……だ」

「だ？」

「大嫌いだ。お前なんか、大嫌いだ！ この、賤しい小人めが!!」

力の限り叫ぶ。もう、これくらいしかできることが無かった。

「あははは。嬉しいよ。そんなことを言ってくれるなんて。やっぱり持つべきものは下僕<sup>みかた</sup>のところだね」

もう、何も返す気になれなかった。

「——じゃあね。我らが正義の味方さん。楽しかったよ」

小人は笑いながら、その手に持ったそれを振りかぶって——

光がはじけた。その全ては、打ち出の小槌へと吸い込まれていき——

——後には、何も残らなかった。

小槌の使用には代償が伴う。

その規模が大きければ大きいだけ、小さければ、小さいだけの代償が与えられる。偽の命を産みだすこと。そうして生まれた、小さな歪み。

その代償は、小さな妖怪一匹に心の底から嫌すわれること。  
どうやら、釣り合いが取れたようだった。

幻想郷を騒がせた天邪鬼きらわれものは、人前から消え、人の記憶からも消え、そうしていつしか誰からも顧みられることなく、どこかへと消えてしまった。

——騙る理想に、捧ぐ覚悟を——

## 第一章

騙る？ いやいやとんでもない。

なるほど、たしかにこれから行われることは「騙り」なのかもしれない。考え方によってはそうかもだ。それは否定しきれはしない。

だが、共に同胞として立ち上がるということ。ともに同じ志を掲げて、それを実現しようとする。それは、何も悪いことではないではないか？  
相手だって、それを望むに違いないのだから。

輝針城、宝物殿。

この城ができた経緯に照らせば、宝物殿などと言う洒落たものが存在するのは誰にとつても信じ難いことだった。

最も、その経緯を知るものがどれほどいるか。

当の小人たちでさえ、そのことは既に忘却の彼方にあつた。

果たして、宝物殿とは名ばかりの、荒漠としたその様子。

財宝で満たされたことも一度として無く。その空間は、存在の意義も失われて、淀んだ



時間のままに、ただ埃を積らせるのみ。

灯りもない。警護もない。ありとあらゆるものが失われた空間。

だが、それでいてもなお、失われていないものが一つ。

宝物殿の最奥部。鎖に鎖雁字搦めに巻かれた状態で、それはあった。

その嚴重さは、守護というよりかは封印に近く、故に、その対象物も、麗しき財宝と呼ぶよりかは、呪わしき遺物に近い認識であるがようだった。

打ち出の小槌——恐るべき災厄を生むものとして、畏れられ、疎まれ、いつしか誰からも触れられることも無くなり、その存在も御伽噺にのぼるのみ。

長い時間、誰からも触れられることなく、ただそこに安置されるがままとなり、今ではもはや、古びた木の玩具にしか見えなかった。

それでもなお。

それは、それを持つべきものの到来を待ち望んでいた。その存在のある限り。

ぎぎぎ、がちやりと。

錆びた金属の擦れる音だった。

そうした音が響くこと自体、久しくないことだった。

次に起きた出来事は、更に稀。宝物殿が作られて、三度、有ったか無かったか。重々しく、ゆつくりと、観音開きの戸が開かれていく。

舞い上がる埃。此処に人が訪れることなど、幾年ぶりどころではない。幾十年ぶりはおろか、幾百年。それほどの時間、人を遠ざけてきたのだから。

そうして足を踏み入れたのは、小さな人影。この辺りには誰も立ち寄らないようで、城内の一角は暗く、室内には、やはり、灯りもない。

人影の手に持つ、燭台だけが、唯一の光源だった。灯りに照らされているのは、小さな少女だった。

薄紫の髪。纏う薄紅の装束は、その身分の高さを思わせる、立派なものだった。ゆつくりと歩みを進める。奥へ、奥へと。

ややあつて、少女は立ち止まり、

「知ってるぞ。お前のことを」

告げる。「お前」とは誰であったか。答える声は無かった。意に介さずに、少女は続ける。

「知ってるぞ。お前が為した行いの全てを」

更に続ける。

「知ってるぞ。お前が齎した、災厄の全てを！」

何たる物言い。為したのはお前達であって、私はそれを叶えただけ。災厄を齎したなどと、言いがかりもいいたるところ——それに口があつたら、間違ひなくそんな言葉を反駁していただろう。

もちろん、この期に及んでも答える声は無い。

無いけれども。

まるで「それ」からの答えを得ているかのように、少女は満足げに頷く。

そして、一呼吸おいて。

「——だがそれでも、お前が必要だ。いや、だからこそ、お前が必要だ。かつての姿を取り戻せ。そして、今一度、我らが願いを叶えるのだ」

一方的な要求。道具の事情など何も考えていないが如く。

いや——道具に事情など、ない。道具は使われてこそだ。使い手を持たない道具など、ただの役に立たないモノでしかない。そして、モノに意思など、けして宿りはしない。

だから、道具の側も、それでよかった。

再び誰かの手に握られること。

その存在の限りに、その願いを叶えること。

己がそのような道具としてあることが、適うこと。

両者の利益は、一致していた。

少女は手を伸ばす。

鎖に巻かれたそれに触れ——把手を握る。

途端。手に感じる振動。

震えている。小槌が。歡喜に咽び泣くが如く。

同時に、仄かに青白い光を放つ。

ばあんと、それを繋ぎとめていた鎖がばらばらに碎け散る。

じゃらじゃらら、じゃらと床を打つ音、それが、小槌の歡びの音こえとなつた。再び目覚め、己の存在を全うすることへの歡び。それを持つ少女もまた、満足げだつた。

呼応。ただただ強い『願い』に反応したのか、それとも或いは、全く別の要因によつて、彼女にそれを持つべき資格の有することを小槌が認めたのか。

「——お前もこのときを待っていたのだな。誰かの手に握られて、行使されるときを、長い、長い間」

小槌の返答はなかつた。

代わりに。

光が強さを増す。その脈動が、言葉にならない言葉として、持ち手にその意思を伝えた。

——疾く。疾く。

お前の願いを申し立てよ。

如何なる望みも叶えてやろう。

如何なる欲望も実現しよう。

何がよい。金か、銀か。玉か。それともその全てか。

さあ、疾く！

宛ら愛を乞うかのような意思の奔流。

一心に寄せられたその想いに、彼女はほくそ笑む。

なるほど。封印された理由もわかるうというものだ。いや、もちろん、既によく知つて、いる。愚かなことをしたものだとは思わなかった。むしろよくやったとさえ思った。自分でも自覚する、自尊心の高さ。小人というものはそういう種族なのだ。そして自分もまた、小人であるが故に——

——はじめよう。

こまごまとしたやり方は知らない。知らなくてもいいはずだ。ただ、願うだけ。純粹な  
思いに勝る儀式など、ない。

昔から伝わるおとぎ話は、それ自身では腑に落ちない点も沢山ある。そこに隠された幾  
許かの真実。彼女には確信があった。

思い描くは、一族の悲願。

我々が全てを忘却する前に。我々が完全に朽ちる前に。

今こそ、全てをやり直すのだ。

全てのものと天を争うのではない。我らが立つこの地こそが、天である。  
全ての民を這いつくばらせる。そのために。

——喩え何者と相撃とうとも。

——喩え何を犠牲にしようとも。

それが、我ら小人の正義なのだ。

振りかぶる。

「さあ、小槌よ——」

歴史は、再び繰り返すのか。

歴史は、所詮、歴史でしかない、そんなもの、知ったことではない。  
少名針妙丸は、そう結論付けた。

祖先が祖先なら、末裔も末裔だ。

繰り返し歴史に背を向けながら。

小人の歴史は、こうして紡がれていくのだった。